

偶然から生まれる出会い

リレーコラム 20

キャリアの積み方-私の場合

国立成育医療研究センター 臨床研究開発センター

小林 徹

自分でいうのもどうかとは思いますが、私ほどおかしなキャリアを重ねている小児科医は少ないのではないかと思います。とある方には私の経歴はブラウン運動（溶媒中の微粒子が不規則に動く現象）のようですね、と評されました。

そもそも学生時代は小児科医になるつもりありませんでした。元々は外科系に進みたかった私は、某外科系の科に入局する事を決めます。ところが入局のための早朝教授面接を目覚まし時計の電池切れのため寝坊したことが教授の逆鱗に触れ、入局拒否されます。そんな私を拾ってくれたのが小児科の森川昭廣教授でした。小児科入局後、重症患者をなくした経験から絶対に選ばないと心に決めていたのが小児循環器でした。ところがたまたま医局人事で小児循環器を選びなさいと言う指示に逆らえなかったことが、私のその後の運命を決めることとなります。

私が小児循環器の修練をはじめた 2000 年、群馬大学の関連病院で川崎病のランダム化比較試験が動き始めました。今思い返すとずいぶん無謀な挑戦でしたが、先輩や疫学の先生にご指導をいただき小児循環器と臨床研究の on the job training を始めます。知識も経験もなかった私でしたので、当時の事は思い出したくないくらい苦しいことばかりでした。何度もやめようと思ったのですが、足を洗うことができず数年間自分なりの best を尽くす努力をします。そうしましたら、なぜか運良く複数のよい研究成果を上げることができました。そして群馬の枠を超えて全国規模のランダム化比較試験（RAISE Study）を実施し、主任研究者の東邦大学佐地勉教授をはじめとした多くの先生方のご協力の下、RAISE Study を完遂することができました。その後、トロント大学の伊藤真也教授に師事して主として系統的レビューの仕事を行った後に、現在は国立成育医療研究センターで自らの研究テーマを極めると共に、臨床研究や医師主導治験の企画や実施支援を行っています。

結果的に自分自身のやりたい事とは異なる道を歩むこととなった私は、研究分野にこだわりを持ちませんでした。目の前の仕事を 120%の力で取り組み、自分ができる best を尽くす事だけに注力しました。その中でたくさんのすばらしい先生方、患者さん家族に出会い、偶然複数のプロジェクトが成功したことが自分の今のキャリアにつながっているように感じています。出会った多くの方々に

感謝しつつ、自分自身がこれから偶然出会うであろう多くの方々に positive な影響を与えられるような存在になりたいと願っています。

★ 著者略歴 ★ こばやし とおる 小林 徹

1997年 群馬大学医学部卒業

同年群馬大学小児科に入局し、関連病院で小児循環器の診療と川崎病の臨床研究を実施。2006年 群馬大学大学院卒業 2012年よりトロント小児病院（カナダ）臨床薬理学分野にて臨床薬理、系統的レビューについて学ぶ 2015年4月より現職。

プライベートでは3児の父であると共に全国亭主関白協会の会員として陛下に仕える日々を過ごす（亭主関白検定一級取得）。

男女共同参画推進委員会より

「偶然は必然」

キャリア理論の代表的な考え方に、「計画的偶発性理論／計画された偶発性理論(ブランドハップンスタンスセオリー)」があります。スタンフォード大学のジョン・D・クランボルツ教授によって提唱されたこの理論は、予期しない出来事をただ待つだけでなく、自ら創り出せるように積極的に行動したり、周囲の出来事に神経を研ぎ澄ませたりして、偶然を意図的・計画的にステップアップの機会へと変えていくべきだという考え方です。具体的な行動指針は（1）「好奇心」――たえず新しい学習の機会を模索し続けること（2）「持続性」――失敗に屈せず、努力し続けること（3）「楽観性」――新しい機会は必ず実現する、可能になるとポジティブに考えること（4）「柔軟性」――こだわりを捨て、信念、概念、態度、行動を変えること（5）「冒険心」――結果が不確実でも、リスクを取って行動を起こすことです。「偶然を引き寄せる」自身の努力も、男女共同参画社会の実現には必要と思います。